

団員が感じたこと

私とカンボジア

川辺高等学校3年

萩原 華音

チョムリアップスオ！

私は異文化理解や国際協力についての考えを実際に現地でしか得られないものから深めていきたいと思い、今回の研修に参加しました。

カンボジア——それは、血と汗と笑顔の国。そして前を向き歩み続ける国でした。先進国日本に住んでいるが故に、私は発展途上国に対してマイナスなイメージばかり持っていました。しかし現地を訪れ、実際に生活を体験してみることで、それらの固定概念は大きく取り払われ、本当に信じるべきは自分の目で確かめたものだけであることに気付かされました。これこそが研修の中での大きな収穫です。

特に印象に残っているのが村での四日間のホームステイです。言葉が上手く通じない中で、指さし会話帳やジェスチャーで互いに理解し合おうとする経験がとても新鮮でした。通じたときの喜びは大きく、言葉というよりは「心で会話」していました。私の11歳のホストシスターは、初日から様々なサポートしてくれました。小学校で英語を習うらしく、お互いカタコトながらコミュニケーションをとっていました。「カノン」と上手く発音が出来ないのか、「カノ！」と呼び掛けてくれました。彼女のその声が今でも脳裏に焼き付いており、思い出す度に懐かしくなります。近所の友達が大勢遊びに来たこともあり、日本にはないフレンドリーさに驚きました。ホストファミリーが日本の文化に興味を示してくれたので、遠い異国の人々に自国の文化を伝えることができたことをとても嬉しく思いました。

現地で生活する中で、心の充足を感じていました。これらはきっと、笑顔がそばにあったからだと思います。カンボジアの心の豊かさには、どんなに進んだ文明もかなわない、と思いました。

そして、現地で汗を流す青年海外協力隊員の方が話された「振れ幅が大きくてぶれない自分の軸を築くには、多くの経験を若いうちにすることが大切だ」という言葉が忘れられません。今回の研修がこれから

の自分を作り上げる大きな土台となることを確信しました。

また、帰国後、ポル・ポト政権による統治を進めていた主要人物のうちの一人が亡くなられたというニュースを見ました。現地に負の遺産として残るトゥールスレン博物館にも行き、命とは、平和とは、と考えを巡らせてきたばかりの私にとって、このタイミングで起きたことに何か意味があるように思えずにはいられませんでした。

「平和とは忘却との戦いだ。」

先日新聞でこの言葉を目にしました。カンボジアの人々は暗い過去を背負いながらも、懸命に前を向いて生きています。本当の異文化理解とは、その人々の背景にあるものを知らない限り決して出来ないものであることを学びました。

この充実した7泊8日の中での経験は、私の中で大きな財産となっています。支えてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。大成長した姿でまたカンボジアを訪れられるよう、日本での日々を意味あるものにしていきたいです。



ホストファミリー 本人：右から2番目



近所の子供達が遊びに来たとき

私はカンボジアが大好きだ

鹿児島中央高等学校2年

岩重 優奈

私はカンボジアで、人生で一番と言っていい程充実した一週間を過ごした。一週間という短い期間だったが、カンボジアを第二の故郷だと思えるのは何故だろう。そう考えたとき、街中にいる人たちの優しさ、ホストファミリーの優しさ、村の人の優しさが頭をよぎった。カンボジアの人たちは皆、また会いたいなと思わせてくれる優しさを持っていた。

街中をバスで走っていたとき、バスの中から手を振ったにも関わらず、街を歩いている人々は笑顔で手を振り返してくれた。多分日本では手を振り返してくれる人は少ない。

ホストファミリーは私にとても優しくしてくれた。私が帰ってきたら、シャワーの用意をしてくれたり、私が美味しいと言った料理を何回も出してくれたりした。たくさんの優しさをもらった中で、特に印象深いのが、手縫いでスカートをつくってくれたこと。カンボジアでは大きな円筒状になった布を体に通し、余った部分をひねって腰に巻き付けてスカートのようにして着るのだが、初めてそれを着た私は上手に着ることができなかった。翌日、ホストマザーから渡されたその布にはウエストの部分にゴムが入っていて、スカートのようになっていた。とても着やすくて、何よりその優しさがとても嬉しかった。日本に帰ってきた今でも愛用している。

村の人は初対面でもとてもフレンドリーに話してくれた。ホストマザーと散歩をしていると、すれ違う人みんなが笑って話しかけてきた。言っていることはわからなくても、話しかけてもらえることが嬉しかった。

この一週間を終えて、私は、カンボジアと日本を「技術」と「人の優しさ」という2つの側面から見てみた。技術の面で見ると日本が進んでいると感じた。蛇口をひねればお湯も出るし、シャワーもある。クーラーだってある。カンボジアにはそういうものはなく、日本のほうが便利だと思ってしまった。だが、人の優しさという面で見るとカンボジアが勝っているのではないか。先述した通り、日本では有り得ない程の優しさをカンボジアでもらった。

今の日本は発達した技術に頼りすぎ、互いを思う

気持ちが薄れている気がする。カンボジアだからこそ人々が協力し合い、人の優しさが自然と生まれているのではないかと考える。

確かに、今の日本の生活はとても便利だ。カンボジアに行って身をもってそれを実感した。しかし、便利さだけがその国の幸福度を決めるのか。その国の評価の基準となるのか。そうではない。日本と比べたら不便に見えるカンボジアでも、実際に生活してみるととても楽しかった。村とのお別れのとき「日本に帰りたくない。」と思う程、素敵なところだった。

私の得意分野は化学だ。将来はお世話をになった大好きになったカンボジアを、化学の面からサポートしたい。感染症の研究や浄水システムの整備など、赤ちゃんからお年寄りまで助けられるような人になりたい。

また絶対カンボジアに行こうと私は決めた。私はカンボジアが大好きだ。



運動会に参加 本人：後列右



お別れ会でホストマザーと一緒に 本人：右

団員が感じたこと

新しい自分とカンボジア

いちき串木野市立串木野中学校1年

岩田 胡桃

今回、私は、言葉の壁や初めてのホームステイといった不安がありつつも、その問題に立ち向かうからこそ、新しい一步を踏み出すチャンスだと思い、この事業に参加しました。私は、この事業で普段の生活では出来ないような貴重な体験をする事が出来ました。その中でも、特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、小学校訪問での体験です。その小学校では一緒に運動会をしました。子供たちは、みな明るく笑顔であふれていて、男女問わず私に近寄ってきてくれました。ついこの間まで小学生だった私は、日本の子供たちは笑顔が少ないと感じました。カンボジアの子供たちみたいにもっと笑顔が増えれば、いじめや、不登校などの問題も改善されるのではないかと思いました。また、教育関係の仕事に興味をもつことができました。その理由は、小学校や中学校で活動している青年海外協力隊の隊員さんを見て、「かっこいいな。」と思ったからです。

二つ目は、ホームステイでの体験です。初めてのホームステイで緊張していた私に、ホストファミリーは本当の家族のように接してくれました。ホームステイ中に少し驚く出来事がありました。それは、晩御飯のとき、鶏肉が好きな私に、ホストファミリーが飼っている鶏を出してくれたことです。私はかなり驚きましたが、ホストファミリーと鶏に感謝して頂きました。ここまで、食べ物に感謝して食べたのは初めてでした。また、自然に囲まれて過ごした四日間で、日本の生活のありがたみを感じることができました。そのように感じた理由は、夜、電気のないところで食器を洗ったとき真っ暗で汚れが落ちているか分からなかったからです。このような生活をしてみて、自分は成長できたと思いました。そしてむかえたお別れの日、私とホストファミリーのお姉さんは大号泣でした。私もたった四日間でお別れなんて寂しかったし、もっとこの村にいたかったです。温かく受け入れてくれたホストファミリーへの感謝の気持ちと、またこの村に行きたいという気持ちでいっぱいです。

私はこれから、様々な国に行ってみたいと思うようになりました。その理由は、その国の文化を実際に自

分の目で見てみたいと思ったからと、沢山の国の友達を作りたいと思ったからです。なぜ実際に自分の目で見ないといけないかというと、私が思っていたカンボジアは行ってみると全く違い、実際に見ないと分からないことが沢山あると実感したからです。その夢を実現できるように、様々なところで役に立った英語や語学を勉強したいと思います。

最後に、私は青少年国際協力体験事業に参加して多くのことを学び、とても貴重な体験をする事が出来ました。このような体験ができたのは、たくさんの人の協力があったおかげです。本当に感謝しています。オーケン(ありがとう)

カンボジアは私にとって第二の故郷です。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



現地の小学生と一緒に 本人：右

発展途上国に触れて

与論高等学校2年

朝岡 里紗

バイクと車で道が埋め尽くされ、クラクションの音が町中を飛び交う。発展途上国はものがない、汚い、お金がない、人が幸せそうでない場所だと思っていたが、そんなイメージは活気溢れる街の雰囲気に一気に飲み込まれた。

私はこの夏、約一週間、発展途上国であるカンボジアを訪れた。カンボジアは約45年前、ポル・ポト政権という独裁政権に支配されていた。政権は、国を指導する政権の者以外の知識層はいらないと考え、教師や医者など知識者を大量に虐殺した。また、政権に背く者も大量に虐殺された。強制労働や飢餓、虐殺で、約200万人の人が亡くなっている。カンボジアは暗い歴史を抱える国である。外国からたくさんの支援を受けて、今もなお復興中である。しかし、発展途上国という言葉と現実にギャップを感じるほど、プノンペンは都市化が進んでいた。

都市部を離れ、6時間ほどのバス移動で街から緑に囲まれた農村地帯へ向かった。私はそこにある小さな村で四日間、村の日常を体験することになった。初めてのホームステイで期待と不安が交錯していたが、村の人たちの暖かい笑顔に包まれ、不安はすぐに消えた。村での生活は日本の生活とは全く違うものだった。水道設備は整っていない、和式の汲み取り便所の横に水瓶と手桶が置いてある。トイレットペーパーもシャワーもない。もちろんクーラーも。教育が行き届いていない、文字を読めない大人も多い。村の平均年収は10万円程度と聞いた。初めて途上国の事実を目にして、日本との違いに驚きを隠せなかった。私には不便を感じることが多かった。しかし、カンボジアの人は誰一人として不幸な顔はしていなかった。鶏の声で気持ちよく朝を迎える。家族全員でご飯を食べる。雨が上がると畠仕事に出かける。日が暮れると家に帰る。自然の流れに身を委ねてのんびり生活している。夜になると、テレビがある家に村の人々が集まる。村の人が勝手に家の中を出入りするがそれは日常のこと、全員

家族のようだった。異国人で言葉の通じない私を笑顔で受け入れ、優しさで包んでくれた。どんなときも笑顔で、誰に対しても敬意を払える素敵な人たちだった。カンボジアの人の暖かさに触れ、何か忘れていた大切なことに気づいた気がする。たくさんの幸せをもらった。

日本人が不便だ不幸だと感じることは、途上国の人にとってはどうってことのないこと。自分たちの価値観を決して押し付けてはいけない。それぞれの地で幸せの形は存在する。わかっていたつもりだが、何一つわかっていないかった。そんなところ行くな、と言われていたけれど「そんなところ」ってどんなところだろう。発展途上国という名前がつけられているだけで、私たちはいつのまにか上から目線になっている気がする。「かわいそうな途上国」を作り上げているのは私たちだ。カンボジアの方が日本よりよっぽど大切なものを持っている。それでもまだ課題の多い国。何かしたいというキモチを力タチにできるように。いつかまた帰ってこよう。オーケン。



ホストシスターと村の友達 本人：左



ホストファミリー宅

団員が感じたこと

カンボジアで学んだこと

指宿高等学校 1年

三浦 香苗

カンボジアで過ごした7泊8日は私が今まで過ごしてきた時間の中で最も濃く、忘れられない時間となった。その中でも、特に私の中で大きな学びとなつたことが二つある。

一つ目は、支援は本当に必要とされている場所に行き届いているのかということだ。青年海外協力隊としてプノンペンで体育教師の指導をする活動をされている岡本さんの話では、「支援をするうえで一番簡単な方法は物資を提供することだけど、首都にはある程度の物はそろっている。でも、本当に物資を必要としている村や地域に物を行き届かせるだけの制度が整っていない。ただ物資を提供することがその国のためになるとは限らない場合もある。」とおっしゃっていた。確かに、その日に見たサッカーの試合の選手達の使用していたボールもユニフォームもいただいたものだと言っていた。でもそれは首都に限ることであって、本当に必要としている場所にものが行き届いていないというはがゆい現状。それを聞いて胸がチクリと痛んだ。

二つ目は、日本での生活がどれほど恵まれているのかということだ。カンボジアの村では蛇口をひねっても出てくる水は直接飲めないし、風呂やトイレは汲み置きの水を桶で汲んで流さなければならなかった。日本との大きなギャップに戸惑いを隠せなかった。私は今まで日本の暮らしに満足せず、小さな不満を見つけては不服に思っていた。でも村でのホームステイを通して、当たり前だと思っていた生活や小さな不満さえもぜいたくなものだったのだと痛感した。日本という恵まれた国から飛び出して異国から日本を見つめ直したことで、日本の新しいとらえ方や日々の暮らしの中に見出す価値観が大きく揺さぶられて、自分自身の成長に繋がったと思う。

私が今回学んだことは、カンボジアという異国へ行き、実際にそこに暮らす人々と一緒に過ごしたからこそ得られたものだと思う。カンボジアを訪れたことで国民の心の豊かさや優しさ、文化、街と村との発展や

貧富の差があることなど多くのことを知ることができた。発展途上国というひとくくりの中のカンボジアしか見てこなかつた私にとって、ピンポイントでカンボジアに視点を向けることができて貴重な体験となった。

そして、私は今回の派遣を通して、薬剤師になるという夢の他にもう一つの夢を見つけた。それは「青年海外協力隊としてカンボジアの発展の手伝いをする」というものだ。今回、国の内側に立つたからこそ見えたカンボジアの様々な課題の解決に、私も尽力したいと思う。そのためにも、まずは自分が誰かに誇れるような薬剤師としての専門的な技術や知識を身につけたいと思う。そしてそれを武器にして現地で活動していきたい。

最後に、応援してくれた家族、学校、友人、温かくむかえてくださったホストファミリー、支えてくれた団員の皆さん、同行者の方々、その他この派遣事業に関係した全ての方に感謝したい。オーラン（ありがとう）。



ホストファミリーと近所の子供たちと一緒に 本人：右から3番目



ホームステイ先のトイレと水浴びをする場所

オークン(ありがとう)

赤徳中学校1年

井上 栄哉

僕はこの夏カンボジアに行き、日本では見ることや触ることができなかったものを体験することができました。

今回僕が行ったカンボジアは発展途上国です。僕は発展途上国は物が少なくて、「人々が不便な生活をして苦しんでいる」というイメージを思っていました。しかし、行ってみると思ったよりも物は充実していました。水道はありませんでしたが、市場に行けばペットボトルの飲料水が安く手に入り、洗濯などの生活用水は貯めた雨水を利用してました。また洗濯機、冷蔵庫、テレビなどの家電やパソコン、スマホなどの電子機器がある家庭もあり、フェイスブックなどのSNSも利用していました。僕の持っていた発展途上国のイメージとはずいぶん違っていて、とても驚きました。

僕がカンボジアで一番すばらしいと思ったのは、人ととのコミュニケーションです。移動中のバスの中から僕が手を振ると、知らない人たちがいつも笑顔で手を振り返してくれました。僕たちが訪問した学校での生徒との交流でもそうでした。カンボジアの子どもたちは、初めて会う僕たちと、まるで前から友達だったかのように接してくれました。交流の後はみんなが僕たちと写真を撮ろうとして、まるでイベントの撮影会のようになりました。

ホームステイ先では夕食を家族全員で揃って食べたことが印象に残りました。日本では仕事や習い事などで家族揃って夕食を食べることが少ないです。ですから、ホストファミリーとみんなで食べる食事はとても楽しい時間でした。また、僕とコミュニケーションを取ろうと、クメール語だけでなく、自分たちが使える英語も使って会話をしてくれました。僕もなんとか知っているクメール語で会話をしようとしたがんばりました。

また、僕は奄美の楽器を紹介するために「六調太鼓」をカンボジアに持っていました。太鼓の噂を聞きつけた村の人々がホストファミリーの家に集まってきたました。僕の叩く太鼓を見て、村の人が太鼓を叩きたいと挑戦してくれました。その人の太鼓に合わせて僕が六調を踊り、みんなで楽しむことができました。言葉がうまく伝わらなくても仲良くなることができてうれしかったです。

僕はこの事業を通して、発展途上国と言われているカンボジアを自分の目で見ることができました。この事業に参加していなかったら、発展途上国がどのようなところなのかということ以前に、カンボジアが発展途上国だということすら知ることができませんでした。僕は発展途上国と呼ばれている国がどのようなところかを知ると同時に、カンボジアのすばらしさとカンボジアの人たちの優しさを知ることができました。これもすべて、両親や同行者の皆さん、関係者の方々、団員の皆さん、そしてホストファミリーのおかげです。僕はたくさんの人たちに貴重な経験をさせてもらいました。僕はその人たちに感謝の気持ちを伝えたいです。オークン(ありがとう)。



ホストブラザーとともに 本人：左



サマキーミエンチェイ小学校にて

団長報告

カンボジア王国での7泊8日

(公財)鹿児島県国際交流協会 専務理事

寺園 直喜

台風5号が通過後の鹿児島空港国際ターミナルには次々に団員が家族と一緒に集まってきた。奄美大島からの団員は、飛行機が着陸できずに1名少ない結団式となりました。仁川国際空港では、鹿児島空港出発が遅れたことから、乗り継ぎ便へは駆け足の移動となりましたが、無事にカンボジアの地を踏むことができました。空港で時計を2時間戻しました。

翌日は、JICAカンボジア事務所で活発な意見交換を行い、ホームステイ先のタトラヴ村に向か日本が整備した国道6号線を西にバスで移動。シェムリアップ市街地手前で右折して、赤茶けた道をしばらく走るとタトラヴ村に到着。村での対面式開始時には団員15名が全員揃い、団員から歓声があがりました。村滞在中は、地元警察の方が毎晩、警備をしてくださり、心強かったです。夜の見回りでは、団員がホストファミリーと一緒に楽しそうに食事や、暗い中、水瓶の水を使って水浴びをしており、異なる生活様式を素直に受け入れており、順応性の高さに驚かされました。翌日は、青年海外協力隊の深町隊員が活動しているオーオンバルレ小学校を訪ね、団員全員で絵画コンテストの最終審査員を務め、表彰式では、団員が「ふるさと」の合唱、「カンボジアの歌（アラピア）」を現地の小学生と一緒に歌い、交流を深めました。小学生の笑顔がとても印象に残りました。次の日は、我々の訪問に会わせて運動会を開催してくださったサマキーミエンチェン小学校で、団員も障害物競争、ムカデ競争に真剣勝負で挑み、1勝1敗の引き分けで終了。校庭の狭さにびっくり。ホームステイ最終日のお別れ会では、村の高校生による民族舞踊、団員による空手の演武、化学実験などの出し物を披露し、最後は、持参した法被を着て、全員が輪になり「おはら節」を踊り、楽しい時間が過ぎました。翌朝は、早い出発にもかかわらず、団員と一緒にホストファミリーが集まり、別れを惜しみつつ村を後にしました。ブノンペンに戻り、井上隊員が指導する高校生のサッカーチームの交流試

合を観戦し、井上隊員らとの夕食会では、団員が次々に質問するため、隊員らは食事を採れたかと心配になりました。カンボジア最終日は、「トゥール・スレン虐殺博物館」やバザールでの「値切り交渉」での買い物を楽しみ、深夜カンボジアを後にしました。

滞在期間中、団員の健康管理や急なスケジュール調整に対応していただいた同行者の方、また、村の様子や団員の取材に汗をかきながら駆け回ってくださったマスコミの方々に感謝申し上げます。カンボジアは、ハード・ソフト面で多くの課題を抱えていると伺っていますが、カンボジアの人々の選択に寄り添った支援の大切さを感じた体験事業となりました。

団員もきっと今回出会った人との交流を通して、改めて「人の幸せ」、「心遣い」を考えたのではないかでしょうか。今回の体験が、訪問した団員だけでなく、団員のご家族、学校の友達、今後団員が接する人々に国際交流、国際理解、国際協力の大切さを広げるきっかけになることを期待しています。鹿児島で御支援してくださる多くの関係者に心から御礼申し上げます。



ホストファミリーと 本人：右



カンボジアの田園風景

同行者が感じたこと

オークン（ありがとう）！ そして、チョールチェット（好き）

青年海外協力隊カンボジア OG

丸野 里美

8月18日、今回の報告会で各団員の生報告を聴かせてもらった。実はこの日、本報告書の提出締切日でもあったが、報告会を経て感じたことを書かせていただく。

まずは、15人の団員と6人の同行者が、無事に元気に帰国できたことに感謝したい。これは、この事業を支える数多くの方々のお力はもちろん、21人の一人一人が気持ちを合わせることでしか実現しないことだったと、今になってつくづく実感する。初日、悪天候で一緒に出発できなかった井上団員が、2日目に合流できるという奇跡が起こった時、14人の団員の心からの笑顔を見て、不覚にも一発目の涙を流してしまったことを白状する。

まだまだ多くのオークンは言い尽くせないが、各団員の報告で、「カンボジアが好きになった」との言葉に感謝したい。クメール語で「好き」は「チョールチェット」つまり、「心に入る」という意味。弓場会長が何度も言われた「まずは全てを受入れて」という言葉に通じる。言葉だけでは簡単に言えるが、帰国後熱を出してしまった団員もいたほど全力で参加した後の言葉としては、大きな意味を持つと感じた。

そして最後に一言、団員の皆さんに伝えたいことがある。

各団員の言葉に、この1週間で「考え方」「自分」「夢」が変わったとあった。私自身を振り返ると、青年海外協力隊員としてのカンボジア2年間の中で、「考え方」「自分」が変わった、というより「崩された」のは、派遣されて半年たってからだった。

小学校教師隊員として村の学校の教師を対象に教材つくりセミナーを開催する活動をしていた時の休み時間、普段は笑顔で話しかける一人のカンボジア人教師が、「私たちも、日本の教師と同等の給料をもらえば、あなたより頑張れるよ。」と寂しい目で言ったのだ。

その一言の後は、セミナーをどう終えて何を語つ

たのか記憶が無い。ただ大きなショックで涙が止まらなかつたことしか覚えていない。当たり前のように教育を受け教師になり、学校備品の教材も十分そろった環境での教師経験を活かして、カンボジアの教師を相手に「定規の使い方も知らない！ゼロから教えないさ！」などと偉そうに張り切っていた自分がガラガラと崩れるのを感じた。「カンボジアの先生たちは、生活費の半分にも満たない給料で、教材も紙も定規も全て自分で買わなきゃいけない環境で、アルバイトをしながらもカンボジアの未来を良くしたい！」と先生を続けていることを、知ってたつもりで解っていなかつた自分に、なんと6ヶ月かかって気付いた。私の真のチョールチェットの瞬間。

今回の体験事業で様々な気づきや自分の変化を実感した皆さん、今回訪問して、見て、感じたカンボジアは、ほんの一部です。カンボジアでなくても、これから出会う様々な国や人、文化に対して、今回の体験を活かして、真のチョールチェットを目指してください。



運動会視察先での温かい出迎え 本人：右



チョールチェットがあふれる村のお別れ会 本人：左

同行者が感じたこと

国際協力体験事業の意義

青年海外協力隊カンボジア OB

佐藤 貴之

(現 三島村立大里中学校 教諭)

私は事前研修に参加することができなかつたため、出発当日に初めて団員に会うことになった。どんな子たちなのだろうか。どれくらいカンボジアに興味があるのだろうか。途上国の生活を受け入れができるのだろうか。不安な気持ちを抱えながら、空港へと向かった。しかし、その不安な気持ちは一瞬で消え去ることになる。「チュムリアップスーオ」から始まるカンボジア語での自己紹介。団員の顔つきに緊張がありたどたどしい話し方であったが、彼らの顔はこれから出会う異世界に立ち向かおうとする精悍なものであった。

ホームステイ先に到着すると、早速カンボジア語でコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。当たり前ではあるが発音、文法、単語のどれをとっても正確なものではない。しかし、指差し会話帳やボディランゲージを駆使して何とか伝えようとする子供たちに感動させられた。ホームステイの後半になれば、村を歩いていると笑い声が聞こえた。初めは伝えたくても伝えられないもどかしさがあり、涙する団員もいたが、自分自身ができるを考え、行動する子どもの適応能力の高さは目を見張るものであった。

ホームステイ先の人たちの生活は農業に従事している人がほとんどであり、決して豊かな生活をしているわけではない。それにも関わらず、日本人である我々に家族のように接してくれた。ホストマザーはご飯の進みが悪いと「仕事頑張れないよ」「しっかり食べなさい」と食べるよう促し、ホストブラザーとは普段の生活やカンボジアについて話をしたり、日本についての質問をされたりと時間を忘れて話をした。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、お別れの日になつた。朝早くにも関わらず、ホストファミリーの皆さんのが見送りに来てくれた。4日間という短い時間ではあったが、私だけではなく団員も充実した時間を過ごせたと思う。それは彼らの表情を見れば一目瞭然で

あった。お別れに涙する子もいれば、泣かずに笑顔でお別れをしようとする子。ホームステイを通して感じたものはそれぞれが異なるだろうが、団員全員が「別れるのが辛い」と思ったことは間違いないだろう。

この体験事業は言葉などが制限された中で自分自身ができる考え、行動する力を養うよい機会になつたと思う。今できることを悩み、苦しみ、考え、行動する。失敗することもあったと思うが、この経験はこれから彼らが成長し、社会に出ていった際に必ず役に立つものだと確信している。

この体験事業を通して、私自身も学ぶことが多かつた。日本に戻り、多くの子どもたちにこの体験を伝え、国際協力について興味を持ってもらいたいと思う。この度は、このような貴重な機会をいただくことができ、事務局、関係各所の皆様に感謝を申し上げるとともにこれから団員の成長に期待している。



ホストファミリーと 本人：左



ホストファミリーとの別れ

カンボジアを通して見たこと

青年海外協力隊ルワンダ OG

吉原 久美代

結団式での団長の「行くと決めて始めた時点で成功と言える」

の言葉通り、最後の最後まで出発を心配した団員もいた中、事前研修を受けた仲間全員で行けた！それだけで言うことなし！大成功！以上！と終わりたいが、そうもいかないか。

事前研修からも感じたが毎回、親御さんの理解協力なしでは成し得ない事業だと頭が下がる。そして今回痛感したのが、この事業も「平和」あっての事だという事。

今回は韓国が経由地であり、最近の日本との状態を聞くにつれ、不安も覚えさせられた。事実その後、一時的と願う鹿児島—韓国便が休止だと体験事業を行える事に感謝し平和を維持する努力が大事だと思った。

村で過ごす。村全体が一つの大きな家族の様だ。村の大人・子供に接して思うのが「この心からの余裕や表情は何なのだろう」と。一つは家族全員役割があり、何か絶対的安心感がある様な。まだまたその理由はありそうだが、こんな状況では虐待も起こる由がない。そして途上国の定義は難しいが、途上国と呼ばれる場所でいつも思うのが「動物がなんて幸せなんだ」と。家族同様の動物達を見てつういると、暑ければ動かず、寝たい時寝て、腹が減れば人間の残り物だが困らない環境。鶏は早いと2時半に鳴くのには早すぎ！とツッコんでいたが、日中は雛を引き連れ、食卓は屋外だったので、土に落ちている人間の食べ屑を食べ掃除をしている。犬・猫は人間の食事が終わった頃に残飯を頂戴しに出てくる。家によっては水浴び用の水溜に虫を食べる魚がいた家もあったと。卵も上手に紐で縛り買っていた。そう！自然に優しいゴミも出ない好循環な生活。気になる事はどこでも気になり、見ていて何がゴミになるかと言えば、便利な物と外部から持ち込まれた物。その中でも実は目立ったのは日本から持ってきたお土産の包装等と気づき自己満足だが、出来る範囲持ち帰る事にした。しかし後で、その

場所でできるゴミの捨て方を実践している団員の話を聞き、現状で出来る事をする事こそ大事だと気づかされた。余談だが日本発祥と言われるトイレのウォシュレットはこんな地域の習慣がヒントでは？と思つたり。温故知新！見習うべきは見習い合おう。

誰もがバテそうな行程と環境の中、全員無事帰れた事は皆の努力と協力の賜と感謝である。健康面で深く関わり話ができた団員もいる中、そうでない団員もいた訳だが、私達は出会う機会を得た。団員には事業全体を通じ「色々な人がいる、大人も捨てたもんじゃない」と思う機会になっていればと願う。そして壁にぶち当たり悩む時は一人で抱え込み、また周りにそんな人がいる時は、その事を思い出し、私達でもいいし周りの大人に話してほしい。大人に、誰かに話してみよう助言してほしい。そして平和で生き易い社会と世界を作っていく同志になろう。この素晴らしい事業が未永く続く事を祈り、携わって頂いた方全員に感謝し、参加できたことを誇りに思います



ホームステイ先の家族全員と 本人：前列右



話を聞かせてくれた歴史の生き証人と 本人：右